



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 590 回 夢想国師の忍耐

2014.8.17

室町時代の僧侶、夢想国師(むそうこくし)にこんなエピソードが残っている。

夢想国師が弟子を連れて天龍川にさしかかった時、渡し舟に乗り込むと間もなく、酒に酔った一人の武士が乱暴に乗り込んで船中で暴れた。

乗客はみな迷惑したが、こわいので黙っていた。

夢想国師は「どうか、もう少しお静かに願います。」と優しくたのまれると「何をこの坊主、わしに説教するつもりか」といきなり鉄扇で国師の眉間を打ちすえた。

師匠の額から、タラタラとほとぼしる鮮血を見た弟子の僧たち、この人たちは今こそ出家の姿をしているが、元は武士、腕に覚えのある人々ばかり。

「おのれ、お師匠様に何事か！成敗する」と息巻くそれらの弟子達を見て、

国師は「お前たちは口先ばかりの忍耐であってはならぬ。これくらいのことでは、仏道修行はつとまらぬぞ。」と順々に戒められ

「打つ人も打たれる人も、もろともにただ一時の夢の戯れ」と歌った。

相手を責めて傷つける人も、責められて傷つけられる人もともに、夢の中の戯れなのだ勝った負けた、盗った盗られた、誉められた、謗られた…そんなことを繰り返している中にお互いあつという間に儂い人生は終わってしまう。

人が夢を見ると書いて、儂い(はかない)と読むが、儂い一生を怒りにまかせて終わってしまったのは、何のための人生か。

乱暴者の武士はたちまち懺悔の涙を流して、国師の弟子になったと言われている。

出典:「仏教に学ぶ、怒らない技術」より <http://bukkyouwakaru.com/ikari/>

確かに、毎日生きていると腹が立つこともある。いわれなき、非難を受けてしまうこともある。人の事は平気で批判するくせに、自分のことを言われたとたん「キレル」、身勝手な凡人が、多くなったような気がする。イライラし怒り、不機嫌なムードが蔓延している。

でも、怒ることの害は、科学的にも証明されている。

米シカゴ大学の研究チームは、怒りっぽい人の血液を調べ、その中に、体内で炎症が起きているときに現れる物質があることを発見し、米医学会誌に発表している。怒りすぎると、興奮状態にもなるので、脳にも作用し、内分泌も悪くなり、消化なども影響する。血圧が上がり、脳出血を起こしたりすることもあり、怒りは身体を老化させ病気を招くこと、真理である。

夢想国師の言う「儂い人生」だとすれば、批難する人も、される人も数十年後にはお互いにこの世を去っていなくなっている。争いごとに、自分の大事な時間とパワーを費やすのは勿体ない、自分が今できることに全力をかけようそう…そんな気持ちを持つことができれば、怒らないですむ。わずかでも、夢想国師の爪の垢に近づけるかもしれない。